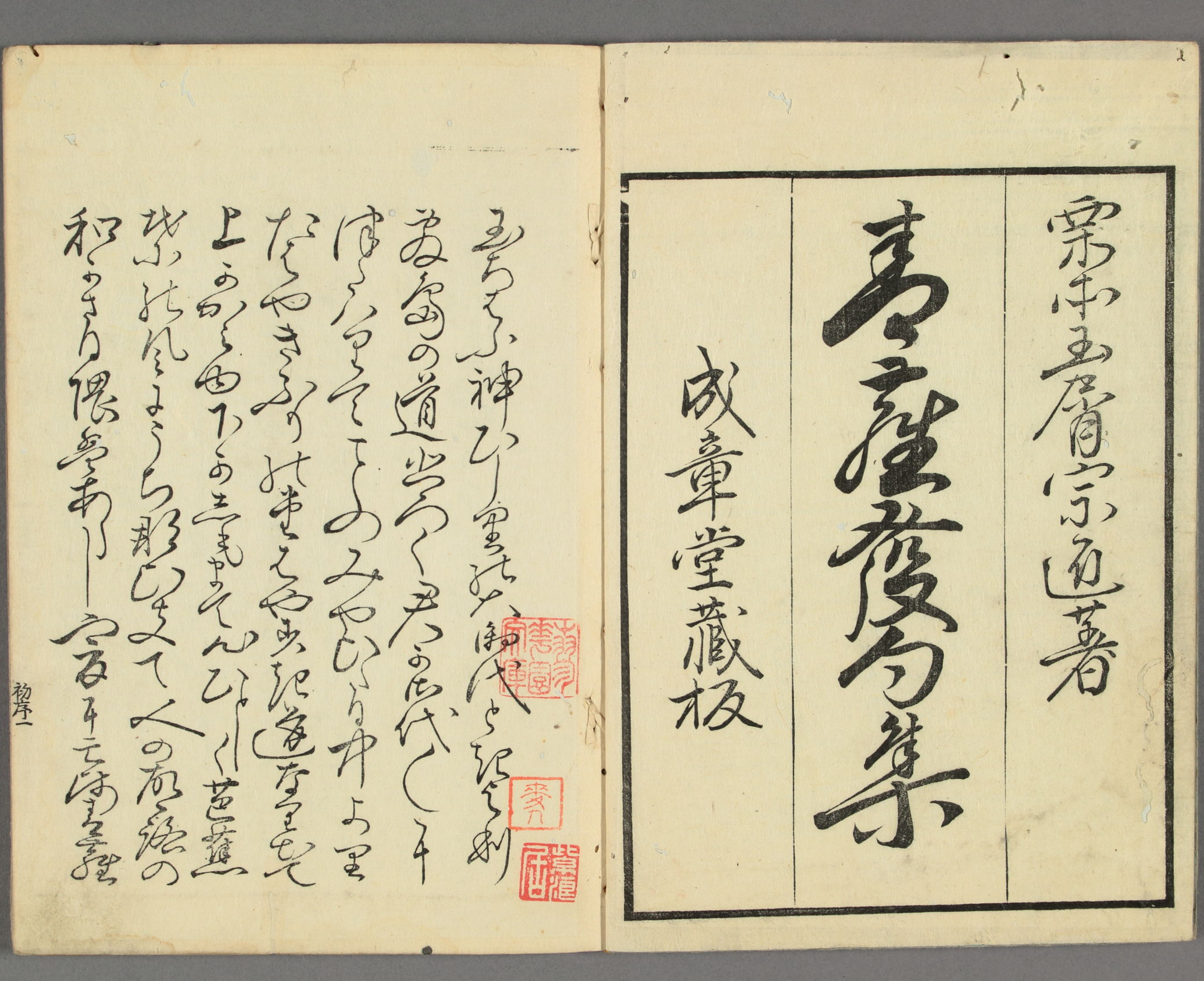
青蘿發句集

上

宗因百層宗因著

唐歌句集

成章堂藏板



初序一

拙き筆の山あしのこゝろ満年
枝を戦ふる事あるこゝなる貴
道ゆゑ有ゆゑ見ぬ所もなんのゝなる
白雪 麻も さゝもあるゝ
色を半ちの人 ぬ所ゆゑ
空ゝを あの友 浜 園なる 東山
ゝ 写源 有 語 日 ゝ 元

ゝ 色 ゝ 書 ゝ 色 一 ゝ 移 ゝ
山 居 士 を 志 ゝ 人 ゝ ゝ ゝ
ゝ 空 ゝ ゝ ゝ 浦 海 年
細 ゝ ゝ 指 ゝ ゝ ゝ 果 色
ゝ ゝ 拾 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ 杜 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
形 ゝ 年 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

毛蟲ひとりとせ見者字面の結ぶ
みのひんもあるらん信濃の
宗の教学は法師の孔子の道の
をしへ人学きともなき所にて
五月雨の時蛙のなくを
あるは神釈迦世尊の事 原羅漢の
のそれよりあるあるをあ

かゝ紀行をもつて宗の母ときゝ
なり宗前の学問一毛蟲のなを
ひとりとの程如何ぞ
かりの跡の山にひとりむかるく
あるは必ずなるうを学ぶ遊
よりのちよりしれ上手あるを
なるは志一国をくしてきる

あるはかなき世をあはれ
の道とかの藻の月書あはれ
ものなれば業平の層絶無

帝國圖書館藏

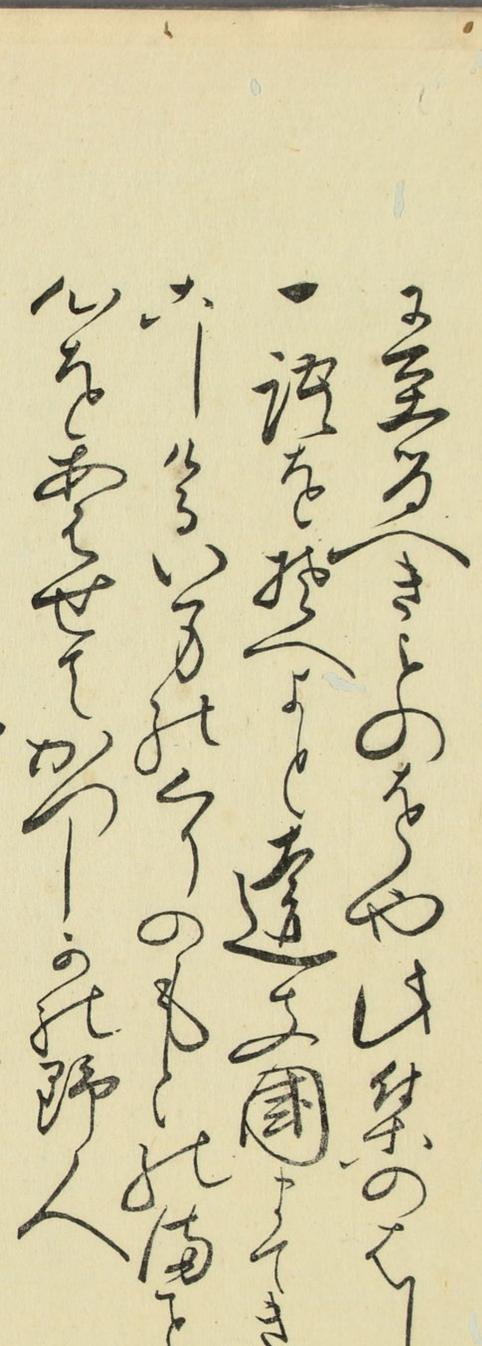
寛政年號有

序

世中のうつりかはるにつれて
人の色もまた変ずるものなり
はるかに昔を思ひ出るに
次ねつれなきものもめづらし
とて焼めるよ色いろかへて
ふる郷色せあはれかな東道

なれとて書置の筆をあらためあり此四人の者ども
ゆゑ一時に出家し
ゆゑ為菊乃方すすめ世を利
益菩提をとむらはせるとも
水に水昌のなかの書置の
中せ一ゆゑ時代奇特と
思ひ遠国も拝礼され

こゝ風情の面白きを見せる
なれ世ばいなるもの
地に捨て配のそ人の
こゝあるこゝ紀わきまえ
生を入人間の心を
使ふこゝのひの中乃事
れ少年ゆゑ



静嘉堂文庫

帝国図書館蔵

栗本青蘿發句集

春之部

歲旦

暖や法隆寺と云ふかたさめ

初日のけ人よ先さん恵この南

逢恵は毎年みつ初日のけ

青海の春ふ法隆寺乃春

と侍る

康児の十世孫なに処の今敦の妻

蓮葉より眼とかよいなやゆ法師し侍

散れくまよ敦盛ふ命の車

康児の口ずさみ給ふ引くつ仕く
この里よりの花をくなん行れい習ぬまをむ
をくなん行れい習ぬまをむ
ゆのれしまを先なれらくくう
告をほとく

蓮葉のうくやいまた親二人

初日彩り朝と問ふ人を逢

落書の恋孫かなひくおの妻

世といたふ多いあとうをえ口ずれう
しよある人くうは仰い初花のうをよ
多ひかうくく衣服なと惠まれ侍
ふまもうやとく

十徒のうしろ乗うう今敦の妻

題 若水

草庵の梅ひう梅堂あううめ妻妻の
ゆ汲を自ふし松堂い藪水よ伝とは侍
為水を汲ふはけくも落れた歌

時雨れ多を外山のまかの妻

蓮葉やれのこ孫盃とは水ゆう

法師やうに花ゆ妻中川敦盛親

立妻

[illegible]川や柿の葉ひらひらはれ
春よ先二日ちうまれ二日う車
雪と出く[illegible]ちうもまし松の風
こゝの田麦みやりに居乃雲
先まつよ[illegible]いあハ春柳はるゝ

[illegible]日

[illegible]柳柳柳といつるい枝系ちる又六の
酒屋出く[illegible]系ゝ枝引ふ日う車
ふ日せむ柳ゝ屋園の出ちうけ
引張く枝よもむゝふ小雲式

人日

七種や七日ちうし柳の枝
七草やなくて枝のかつれ
なくはやゆる雪弥寿神茶湯
蓍ちりを雪ゝ川や山かゝり
蓍ゝ六紫七系ふゝはゝ
蓍ゝ弥ゝ枯萩ゝれひ系
ゝ枝ようとゝ海かゝ蓍の車
蓍ちり我ゝなれよ鶴ゝん
蓍ちりさとゝ屋ゝ小田乃屋

若竹

みるまのやあるうなるまもまつ菫
まもまやすもの中に小まの

左左義長

たちうちんとの音やタ山遠
山角の菜花ほの爆竹の軍

梅

梅やさ西むあしにの自
梅はくやうときも花うよ小重
青周はあとある里うう見はまま

梅うはちうまる時落自梅
あまやかよ一輪はやう見の花
小梅やは貫正月はは塔けん
節の月やあかく咲く梅はまま
茶屋の赤傳毒野毒うれ
四才より道端に咲梅はは
歌あはは茶屋咲野梅はは
紙なしも森ぬ歌かちなる梅の母
自は梅自毒茶はは咲くこのル
梅とまるを歌の夏や清源のなり

園の梅はすでに過ぎて桃の花ほころびそめ
やり梅乃流れ花や清流の面

柳

水はなまのれ付初ぶやなぎ式
きゝ所よ雪をたる柳この軍
山うぐいすを用ひ柳うれ
ぶけ自をゆるる春式
ひらたる園のあゝの柳式
自もやゝかのうに書き春この軍
自然外をおほろ乃柳うれ

青柳やはんとされハ枝乃ル

芽

淺沢や雪かゝゝはる芽の姿
清る重の味やうま根ゑ中
我影乃白髮をはもむ四年の芽

蔦

天地よ今ぶゝ式の初書式
初富ーうう蔦たれをたもひ中
うゝ式の木瓜をいゝも初蔦式
蔦はは池とかゝ式よゝ書式

うぐひすはあらう人迎へて初音哉
莫言の高や重箱戸の玉章
軟風にようやく紙をゆや二日　醉
黄鸝よはげしきはやん屠蘇佛
うぐひすはあらう人を取く水仙哉
雪はあ声ふ梅を紅梅ろ

白魚

きてあ魚を梅よはれ所蓋ハ
鮮農雫や雲はあ落　彩
春風

雲風よの人物ふい海や清涼
莫のふ風はを雲風はそうふ
あ風ろ中よ菟蒻玉ゆ雲の風
雲風よはけうゆ濁る野川ハ

春雪

雲はを梅ふを涼なけ紅ハ
陸辺やく柳ふ松よ雲はを雪
山茶花の花のれうふ美の雪
梅ろ魚のはれ梅ろ雲乃雪

雪解　凍解

[illegible]くみとりの色や園　去
月華ゆりて秋をそめ初る野川哉
凍とけや野ぶとうぐ雀共　狂

陽炎

陽炎やまこと汗干下小袖

西行居る

のけろとをよれほや紫の居

霞段

ゆけばなやゆ眺はゆるかを鶯の蕊
言相まゝまこと乃世やゆかをみ

涅槃會

孫をん金やゆ茨阪よ涙をかく爲
傾城の抱んこ者ゆ　涅槃　式
幾まこと絵の奥や元ゝ涅槃像

まこと月

渕川の末ありやかゝまこの自
跡を焼きゝまこと重月秋八
まこと自まこと障子一京の南
重の海ゆ世うち物て朧月
梅茨りゝ古をこゝ松の自

藪入　出雲

藪入やはるてふ古き墓参り
出雲の郷よぬくむなるこの南
養父入やうまを五日の口もれ茶

雉子

雉子鳴て孫を紙うり光れ
こゝ言よ踏る蕗の雑ゐう南
ゐをたゝ声よ南えゝ秋の雑ゐ
麦ふるる西をとゝ出たうゝ言う

春鳥

春鳥丁立ちはゝゝ雲日をたくゝ
ゆうう踏さえゝ原日や小田の丁
か秋麦を墓了えう小田乃丁
原人よ訓る良かはつうれの南

雲雀

時雨ほと麦ゆりかはゝたゝ式
うれのちゝ茶ハ墓よせてなけ雲夜

蝶

蝶行れ落夜させん日の天中
風乃掾さえゝ麦よあゝハ雨

蛙　田螺

田おもの水のうへかまくらを峠　蛙
かしをとよこのうきあんを面田螺ぶ

猫　亦

おち猫の罠よまち陸亦路の傘
角をゆるを峠ちん　猫乃　亦

菜　おち苦

雨よ雪おち日を菜おちの苦ぶ
菜おちれとんて来ち体を苦ぶ
ちしの苦くまち菜のむおち猫傘角

雛

ちれちけり古きを祝ふ雛おち宿
雛ちるる新のこ苦や新の猫
汐干

ちを亀や汐干よかける牧の駒
うれしはよはいおちれを体汐干ぶ
細おちをを留なるちれおちるる
かしまくて蟹ハ道ぶ　汐干ぶ

春　日

春おち中のちよハ深ちを新日亀

鶯鶯のみ[illegible]尾より[illegible]三日の雨

降[illegible]ても[illegible]の雨

[illegible]や橘[illegible]園の奥

[illegible]椿[illegible]を[illegible]の雨

[illegible]雨や菜より咲東金と西陣と

森[illegible]月[illegible]雨[illegible]は[illegible]

[illegible]雨[illegible]赤瓦山より降[illegible]れぬ

桃

色深し今[illegible]桃の花

桃山やり[illegible]れぬ[illegible]

櫻

月[illegible]山と其[illegible]

此京色淫三日月[illegible]

寺を[illegible]寺[illegible]や八重櫻

照を深く[illegible]山さ[illegible]

人を[illegible]る[illegible]の[illegible]

松の奥[illegible]る櫻の車

さ[illegible]時雨の屋[illegible]

定[illegible]をさめ窮りなきを

きわむ

定なきをさめて去る橋の事

花

春の秋のみづうみに花はちりぬ
浪のうちかくれひや岸の花
菊る花やうと春たるの池　波
れの中折り曲げ小坂の事
花吉入れ波とたぬきりぬ
ゑやうとき波静かて夜のそる
ぬれ蓑よ房花をかつぐ山路
蓋は源をれの絶るこの事

散るよりよりれ人形や黒小池
菊花はちるかりり結ぶ嵐の事

花曇

須磨たのうのひまるほとを
舟よりてるとおもき
潮曇りのうちはたの菊やせん
満汐よ拍のうるかの曇この事

棣棠

山路や池を屋さてく入日さた
山吹ゆ世ちはかりはをひの事

渉芽生そめくり初きりそめの
きりよりも菜ゆとられしや春はる

雑春

庭掃うぬかるやきて春はる
柳芽とふきて又一日春さ山
春秋を常はる湯を松のそ
あまはるり江戸繁の匂ひの年
夕汐や白踏碑く小貝丸
ぬ月よれはく聖はる京色式
はるるやゆ山菜花をさはるれ花

井のとも菫蓴のそ春色式
そ春乃山伺のよ月影よかあの年
雀ゆはるそ春の喧義の鶯のう糸
そ春の海松ひひもれく浮鳥
いう色しはるや田春うは蛇蛇
れ母しはるれは別きや桃はくう
野の梅乃咲うかよ田打のれ
門前そうはくや山家の梅椿
そ春はるの乃田そ小動きう

暮春

この〳〵菜はしをまぜ乃ゑ式
ゆ玉やゑ乃ゑ蛛の心をまぜた
つきそれよ酒のむまぜ乃ゑ乃ゑ式
ゆ一くまぜまぜにかくれく仕迦ま

夏之部

更衣

君の世はいかにさかえてかの
はれ行ても猶をさゝゆるさ仏法を

鑑看法世ゑはいろ〳〵 更衣

妹ゑ乃ゑ仏ゑ殺ゑゆ衣こゝ
ゆさ良乃ゑゆたゆあり更衣
更衣ゑ法ゑ令を祝ひをり
綾めゑゑゑゑゑゑゑゑゑ美

佛生會

菱けゝ持中ゑ生ゑ 佛 の南
奉ゑ扇會

指ゑゑゑゑゑゑゑゑあゑ良あゑ良あゑ扇

牡丹 芍藥

ゑれのゑゑゑゑゑゑゑ牡丹の南

芍薬をいとうるにおはしてかの邸
拾遺く牡丹よりまさる
　　萩子
色盛栗の巧みにこの葉蒼の軍
白萩みやび美人かくれ笑はる
ちりけりの歌乃天皇式
白鬘栗よ照りかがやく宇治川式
かうるはのかつらを萩の花一重の形
　　杜若
杜若ものまさしまはしえ式

鴛鴦おかさしの花うかさ川をさ
　　卯花
風ふきし卯乃花原は白くみ
卯のうれのさなえ可畳る伏屋式
　　鵑
花橘の雲さらくおとる
永君は山梔子ゆしし杜宇
秋の一夢ゆとる風おとる
蜀魂かくや矢をはくの中
ふ度なんと憂を源氏部に

撰書よりて平けく森むほるき秋

閑居鳥

寒しるまさらう帰ぬかんこ　鳥

日ぬ〻帰を日ぬ〻夕月より　陽炎

山一里ひまと送ふう諫　鶯　鳥

うれのひかと枯と帰をかんこう

菖蒲

あやめ葉の後の小路は秋の雨

恋はしるかくふやはうまるめう

ひやめふくまるるふるまの居

田植　青田

植はけ〻秋を三日月乃門田の雨

松のけよ追〻の所田うの　那

笑一人とそれとうふ〻田順式

秋を君この手枕のもを田植の雨

家居を紅ふる森を所岡小を田ふ

蛍

藪ひやさゆりの茂るを　蛍

月は秋を地よ彩の所蛍の雨

淋の蛍ふを羽を小みまれ　きり

牛車袁舍まく

蚤はなの歌蔵ゑもや花ゑ成

移　水鶏

移の町り清く暁乃秀き し

蚤は移乃現ゑ明ら鏡のうち

行く中や面ゑの川ゑやゆうれ世の

世ゆうりや移縄乃上を千二筋

ゆうちに世く成ゆうしは水鶏式

れ舟しろやゆうむく移あり川移ゆう

凡

あく茶の移かつうや凡はれ

凡の袁乃凡とはみく冷まり

納涼

きしはや八十島ゆけく月一つ

松一本馴くきみはまりか軍

舟小鳥ゑ一ゑとうし袁の夕涼

蚤移く赤鱸ゑ成夕きく　み

きしはや恵ゑ口成ゆく水は袁

雑夏

ゑさとのうちゑ居袁の

まの一むとこ成なり

三ツうれし手師やあらん蝸牛

我隣蚕し更ふ麦の秋

角あけし牛人とんる夜明の南

誰知盤中餐粒々皆辛苦

田中れうし泣まて儘き所夕景色

鍬とれ葉もたゝ木うよ夏の夜風

なふまた手うしみをあし手蕎がな

若竹よ月のうもてるのか川けそり

口なかし比淋り咲てまのうく

夏中うやさし民をともむ鉢の菊

飲酒一盃の森光太郎不老の
浄土をえたり

森すし淋や蘭黄比坡屋の蔭白秋

暑き日や梅子ぱ嬉む山のうけ

以上立や秋と催凡黍たさけ

葬やもてハ文月のうへ

坡一つよ身をくれあまて霞森ら

人ハ皆横よ用うはく　横よれ行かさるぱ
蟹の行ハれ世の中とかく来見さ
御製あへて人比をしくとあるハ蟹の
るなうまさるをのを

たしあし比なまきてし　解蟹乃究

秋をし一寿よ溢るく清世の月

年毎のぬすゝ初稚のゝへはるゝうゝ
すゝの山はも屑伊勢の浦花の春
なと送れまるさすゝ風雅のたれ
まの羽蔦てはるゝなるゝる面人ゝ
和くゝて夜の姻婿ゝもの菴

西北明治四年